

題目 公共交通機関利用の阻害要因－札幌市における路面電車の社会調査－

氏名 碓井 里咲

指導教官 大沼進

高齢化社会における社会的弱者のモビリティ確保や環境配慮の観点から、公共交通機関の拡充が現在の社会に必要とされている。その中でも、路面電車は建設・維持コストや利便性の観点から着目されており、世界中で急速に普及しつつある。一方で、一人ひとりが個人の利益を優先し自動車ばかり利用して公共交通の利用が少なくなれば、本数が減るなど利便性を損ねていく。そこで自動車利用を控え、公共交通の利用を促進するための方略を検討する必要がある。本研究では、札幌市の路面電車がループ化（延伸）するにあたり、公共交通機関利用の促進や阻害に関する心理的要因を明らかにすることを目的としている。

調査では、路面電車とバスや地下鉄などの他の公共交通機関の位置関係を考慮に入れて路面電車沿線の3地域を選定した。さらに徒歩5～10分以内で隣の停留所にたどり着くため徒歩10分以内の地域に限定し、その周辺に居住する世帯を対象とした質問紙によるアンケート調査を投函・郵送回収で行った。配布枚数3491票、回収枚数1235票、有効回答率は35.4%であった。質問紙では、路面電車をはじめとする公共交通機関や自動車の夏期・冬期の利用頻度、路面電車のサービス認知、路面電車の不便な点・改善点、路面電車ループ化の評価・受容、自動車利用の態度、基本属性などの項目について尋ねた。

分析結果から、公共交通機関の高利用者は路面電車を利用している頻度が高いため路面電車における不便な点や改善点を認識し、路面電車の利用意図が高く、また自動車利用を控えようという意識が高かった。また共分散構造分析の結果から、公共的便益が利用意図に大きな影響を与えており、路面電車は公共的便益がある評価する人ほど利用意図も高かった。環境懸念に関する自動車利用から公共交通利用意図にも関連がみられ、環境懸念している人ほど利用意図が高かった。ループ化における総合評価に関して、ループ化は公共的便益がある人ほどループ化における総合評価が高かった。自動車利用抑制意図に関して、公共交通機関の利用頻度と自動車の必要性が自動車利用抑制意図に影響を与えており、公共交通機関の利用頻度が高く、また自動車を利用することで環境に悪影響を及ぼしていると感じ、自動車の必要性が低いと感じている人ほど自動車利用抑制意図が高かった。今後、公共交通の利用頻度の高低に応じて阻害要因への対処方法を検討する必要がある。